

平成 21 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18592454

研究課題名（和文）

前期高齢女性の近隣他者との交流関係を活用した主体的健康増進プログラムの開発

研究課題名（英文）

Development of a voluntary health promotion program for younger elderly women based on exchanges in the community

研究代表者

大森純子（OMORI JUNKO）

聖路加看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：50295391

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：地域看護学 健康増進 前期高齢女性 社会関係 介入プログラム

1. 研究計画の概要

高齢化が進展するわが国では、団塊の世代の高齢期への移行に伴い、前期高齢者人口の急増が見込まれている。高齢者のQuality of life（生活の質・人生の質）の向上を支援する地域保健活動として、特に配偶者との死別後に独居への移行が増加している前期高齢女性を対象とした、日常生活における地域社会に根ざした主体的な健康増進の支援を検討する必要がある。

そこで本研究では、前期高齢女性の多面的側面からなる健康のうち、社会的側面に焦点をあてる。更に社会関係のうち、身近な地域社会における日常的な近隣他者との交流関係に着目する。日常生活において、物理的な近さや情緒的な親しみから、前期高齢女性自身が身近であると感じる同年代の同性の近隣他者との相互行為から継続的に取り交わす『気遣い合い的日常交流』を活用し、主体的健康増進プログラムを開発することをめざす。

2. 研究の進捗状況

2006年度に米国公衆衛生学主催のセミナーに参加し、地域づくりと健康増進を同時に包含する新たな実践研究アプローチであるCBPR(Community Based Participatory Research)の理念および方法を修得した。

2007年度には、CBPRの理念および方法に則り、協働自治体と協定を結び共同実践研究事業としてプログラム開発に着手した。前期高齢女性の健康増進の予防的アプローチとして50歳代・60歳代女性のための近隣他者との促

進プログラム(試案)「10年後の私たちの暮らし(未来予想図:未来の樹)を描こう!」を作成し、今後10年間で前期高齢者人口の急増が見込まれる新興住宅地域にて実施した。日時：平成20年2月9日～3月8日毎週土曜13:30～16:00全5回 場所：地区小学校 参加者：50～60歳代女性24人(延108人)。

2008年度は、量的・質的データの両面から、プログラム実施後の日常生活における近隣他者との関係性の発展とQOLとの関連、および地域における主体的な健康増進活動について経過を追った。1ヵ月後(4月)、6ヵ月後(8～9月)、12ヵ月後(2～3月)に、3回の郵送法により自記式質問紙調査と、1回(6ヵ月後のみ)のインタビュー調査を行なった。調査結果からは、参加者のQOLの認識は精神・身体的側面、心理社会的側面、社会的側面の認識が維持・向上し、参加者の意識は個人の先行きに対する陰性の情緒的反応から、将来への前向きな姿勢と仲間意識やコミュニティへの愛着へと変化した。個人・集団・地域の多次元レベルの複合的効果をねらった新興住宅地域における中高年女性のための予防的・主体的な新奇の健康増進プログラムとしての意義を確認できた。

3. 現在までの達成度

当初の計画以上に進展している。

(理由)

当初の計画には含まれていなかった、地域づくりと健康増進を同時に包含する新たな実践研究アプローチであるCBPR(Community Based Participatory Research)の理念およ

び方法に則り、協働自治体と協定を結び共同実践研究事業として、研究活動を遂行している。

協働自治体の保健師と地域特性をアセスメントした結果、新興住宅地域における前期高齢女性の健康増進のためには、予防的アプローチが必要であることが把握できた。そのため、50歳代・60歳代女性のための近隣他者との促進プログラム(試案)「10年後の私たちの暮らし(未来予想図:未来の樹)を描こう!」を作成し、今後10年間で前期高齢者人口の急増が見込まれる新興住宅地域にて実施した。募集人数を超える申し込みがあり、この年代の健康ニーズの存在を確認することができた。既にプログラムの構成および内容、ならびに参加者の変化により、試案プログラムの一定の成果を確認できている。最終年度は、参加者個人のレベルに加え、自主的な交流を継続しているグループや地域のレベルにおいても、継続的に評価を行なう予定である。

以上のことから、当初の計画以上に、地域住民の暮らしや地域保健活動の実践に密着した研究活動を展開しているといえる。

4. 今後の研究の推進方策

2009年度は、3年間の実践研究の活動成果を統合し、最終的な近隣他者との交流関係を活用した主体的健康増進プログラムを完成させる。量的・質的データの分析を更に継続して行うと同時に、このプログラムの普及をねらい、学会発表や学術雑誌での公表を行う。また、これらのプロセスおよびアウトカムの継続的な評価に基づき、試案プログラムの企画・運営上の課題と意義を検討し、総合的な評価を行い、プログラムの内容を洗練させる。プログラムの参加者間の日常生活における交流の発展について、集団(自主グループ)としてその変化をアセスメントすることにより、地域の健康資源としての検討も行なう予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

大森純子、前期高齢女性の近隣他者との交流関係と健康関連QOLとの関連、日本公衆衛生雑誌、第54巻9号、605-614頁、2007、査読有、原著

〔学会発表〕(計2件)

大森純子、50~60歳代女性の近隣他者との交流促進プログラム：健康関連QOLの変化、第67回日本公衆衛生学会総会、2008/11/6、福岡

大森純子、新興開発住宅地区における50・60歳代女性の近隣他者との交流促進プログラムの効果：参加者の意識の変化、第28回日本看護科学学会学術集会、2008/12/4、福岡

〔その他〕

聖路加看護大学図書館リポジトリ URL：
<http://arch.slcn.ac.jp/>